

パリの銃撃犯は、シリアでの NATO の代理戦争から帰ったばかり

【訳者注】アルカーイダを始めとする“テロリスト集団”が、もともと、アメリカ以下の西側政府の戦略によって、カネをかけて訓練され、援助され、養育されたものであり、テロ実行犯がヒモでつながっているのは“イスラム過激派”などでなく、西側情報局だという認識は、この人だけのものではない。真相を究明する多くの人が同じ見方をしている。もう一つの「私はシャルリではない」と併せ読まれるならば、更に納得がいくであろう。強調は訳者による。

By Tony Cartalutti

Global Research, January 08, 2015



銃撃犯たちはヨーロッパで過激化され、シリアへ送られ、帰ってきた者たちで、これまでに西側の安全保障局によってテロ活動で逮捕されたことがあり、フランスと他の西側情報局の監視リストに長く載っていた。にもかかわらず、**どういうわけか**、彼らはヨーロッパの中心部で、高度に組織された攻撃をやったのけることができた。

あまりにもよく知られたパターンだが、2015年1月7日、パリの新聞社の攻撃に関わった銃撃犯たちは、フランス市民であり、ヨーロッパで過激化され、シリアへ送られてダマスカス政府に対して NATO の代理戦争を戦い、その後、彼らが今国内攻撃を行ったばかりの場所へ連れ戻された。更に言えば、他の多くの国内攻撃のこれまでの例のように、この容疑者

たちは長く西側情報局の監視下にあり、少なくとも容疑者の一人は、テロ行為で前に逮捕されている。

<https://www.facebook.com/anthony.cartalucci/posts/1522064184736317>

USA Today は、「2人の仏テロ容疑者狩りが継続中」という題であえてこう報道した——

<http://www.usatoday.com/story/news/world/2015/01/07/france-charlie-hebdo-satirical-publisher/21377861/>

容疑者は2人の兄弟——サイド（34）とシェリフ・クアチ（32）、ともにフランス国籍をもつ——と国籍不詳のハミル・ムラド（18）だと、あるフランス警察官はAP通信に語った。彼は公的に話すことを許可されていないので、匿名という条件で話した。

USA トゥデイはあえてこうも言った（強調引用者）——

2人の兄弟はアルジェリア系のパリ生まれで、シェリフは、テロ活動のために2008年5月に、3年の禁固刑を受けた。兄弟はともに昨年夏、シリアから帰ったばかりだ。

お決まりの西側によって過激化されたテロリストだということ、最初 NATO の代理戦争をするためにシリアへ輸出され、次に、輸入されて西側情報局によく知られた存在となり、高度に組織化され、首尾よくいったこの襲撃を実行したこと——こうしたことが暗に意味するのは、この攻撃自体が、西側情報局そのものによって承認され、企まれたものではないかということである。これは、冷戦時代に、外国人傭兵としても国内の扇動要員としても使われた、過激化された戦闘員のネットワークによる NATO の情報作戦のやり方を、ほとんど鏡のように写している。冷戦の末期になって、このような戦闘員グループの一つが、まぎれもないアルカーイダとなった。すなわち、今日まで西側によって武装され、資金援助され、雇用されている戦争請負兵フロントである。

さらに言えば、どう見ても、このパリで攻撃に参加した兄弟は、フランス政府自体によって支給された武器をもって、シリアで戦っていたようだ。「France 24」は昨年、「フランスがシリアの反乱兵に武器供与したことをオランダが確認」という記事であえてこう言った——

<http://www.france24.com/en/20140821-france-arms-syria-rebels-hollande/>

フランソワ・オランダ大統領は、木曜日、フランスが、シリアのバシヤール・アル・アサド政権と戦っている反乱軍に、「数か月前」武器を供与したと話した。

パリの銃撃を“イスラム過激派”の仕業とするのは、これらのテロリストが、外国では敵と

戦い、国内では民衆を脅し恐怖を煽るために、西側によって意図的に作りだされたという事実を隠ぺいするためのデマである。

デマに乗せられてはならない

どんなニセ旗攻撃でも、それは政府が民衆を誑かし、そうしなければ正当化できない対外・対内政策を押し通すための工作だが、そのとき一連のデマが流されて、民衆は攻撃の本当の性質から目をそらされる。

今回のパリの攻撃では、“言論の自由” “イスラム過激派を断罪する” “寛容” “過激思想” といったまやかしが表面に踊り出て、攻撃を実行したテロリストは、“イスラム過激派” にでなく、西側情報局のヒモに、ずっと前からつながれているという事実が、覆い隠されようとしている。実は彼らは、十分に資金を与えられ、武装され、訓練された傭兵隊であり、すでに 2007 年から記録されて、西側の対外政策の不可欠な要素になっているのである。

実際、アルカーイダや、その名をさまざまに変えたグループは、“イスラム過激派” が作ったものでなく、西側の対外政策から生まれたものであり、“過激思想” は戦士たちの洗脳の一部は使われるが、それはもっぱら西側のアジェンダに奉仕するように仕組まれている。

圧倒的にシーア派のイランを転覆させるために、ブッシュ政府は、簡単に言えば、中東でのその優先問題を再構成しようとした。レバノンでは、ブッシュ政権は、スンニ派であるサウディ・アラビア政府と協力し、イランの援助するシーア派組織であるヒズボラを弱体化するための隠密作戦を行使した。アメリカはまた、イランとその盟友シリアを狙った隠密作戦にも参加した。これらの活動の副産物は、スンニ派の過激派グループを勢いづかせたことだったが、このグループはイスラム教の戦闘的ビジョンを大事にし、アメリカには敵対的で、アルカーイダに同調する人々である。

今日に至るまで、アメリカと、トルコを含むその NATO 仲間、イスラエル、サウディ・アラビア、カタールを含むその地域仲間は、シリアや、そして今はイラク国境の、内部や周辺の“イスラム過激派” を、武装し、資金を与え、保護し、訓練し、その他あらゆる面で永続化させている。 <http://journal-neo.org/2014/12/17/isis-bloody-footprints-lead-from-nato-territory/>

現実には、ペルシャ湾の独裁国を通して“ロンダリング”された西側の支援がなかったら、そして、ペルシャ湾と西側の情報局が共同で経営するモスクの地球的ネットワークを通じて現れなかったら、“イスラム過激思想” などというものは、ほとんど存在しなかったであ

ろう。“過激思想”を、この地球規模の、西側の承認するテロ・キャンペーンの真の仕掛け人によって用いられる手段でなく、大義として強調するなら、このようなデマが永続化されるだけでなく、我々を脅し恐怖させるテロリズムそのものが永続化されることになる。

西側は明らかに、国内の過激派訓練/徴兵センターを維持している

最近のシドニーでの喫茶店人質事件は、オーストラリアに避難所を与えられ、反イラン・プロパガンダとして利用された、反体制のイラン人に注目させたが、これは、シドニーの経営する、過激派訓練と徴兵の巨大なネットワークを、明らかにするものだった。これは、シリアでの西側の代理戦争を支持し、戦士を送り出すのに利用されている。このネットワークには、オーストラリアの法執行機関や情報部によく知られた、多くの悪名高い個人が含まれていて、その多くはシリアへ渡航し、有名なテロリスト組織と共に戦ったことがあり、帰国を許されて、オーストラリアで政治活動を続けている者たちだ。

デイリー・メールの記事「[なぜ警察は、以前のテロ容疑者に ISIS の旗を要求したのか?](http://www.dailymail.co.uk/news/article-2874073/Why-did-Counter-Terrorism-police-ask-Sydney-man-former-terror-accused-Zaky-Mallah-ISIS-flag.html)」にはこう書かれている――

<http://www.dailymail.co.uk/news/article-2874073/Why-did-Counter-Terrorism-police-ask-Sydney-man-former-terror-accused-Zaky-Mallah-ISIS-flag.html>

テロリズムを取り締まる警察が、シドニーに住み、かつてテロで告発された Zaky Mallah と接触し、ISIS の旗をもらえないかと持ちかけた。

マーティン・プレースでの面談が始まって4時間を超えたとき、ニュー・サウスウェールズ州警察の、テロ取り締まり合同チームの警官たちが、彼の所有する ISIS の旗をもらえないだろうかと言った。

西シドニーのウェストミード出身のザキー・マラー (30) は、対テロリズム警察に、彼のアパートの壁に掛かっている、良くも悪くもないイスラム・フロントの旗をあげようと言ったところ、“彼らは興味を示さなかった”。

この記事はこうも述べている――

2年前にマラー氏はシリアに渡航し、FSA 反乱軍と共に生活し、ムスリム強硬路線をとるバシヤール・アル・アサド大統領に対する血なまぐさい内戦に参加したが、“やがてそれは狂気じみてきた”。帰国して後、彼は、若い者たちに、シリアへ渡り聖戦に加わって、アサドに対して起こされた自由の戦いを経験するように勧めている。

オーストラリアのように、フランスも明らかに、シリアへ渡った後帰国して、その間ずっとウォッチリストにある、前テロリストの集団をもっている。そして少なくともオーストリアでは、これらのテロリストの一部は、文字通り、安全保障局のスピード・ダイアルに載っていて、明らかに、情報共同体が監視し、かつ維持している、あるネットワークに組み込まれている。

このようなネットワークは、シリアの NATO の戦争で戦う何千もの新兵を送り出す。BBC は「イスラム国家の危機：3000 のヨーロッパ聖戦士が戦闘に加わる」という記事で、あえてこう伝えた——

<http://www.bbc.com/news/world-middle-east-29372494>

シリアやイラクで、イスラム主義戦士に加わるヨーロッパ人の数が、3000 人以上に増えてきた、と EU の対テロリズム責任者が BBC に明かした。

Gilles de Kerchove はまた、西側の空襲が、ヨーロッパへの報復攻撃を増やす危険があると警告した。

このような大量のテロリストが外国から流れ込み、西側が現在戦っているとされるテロリスト軍団と合体して戦うかもしれない、西側はこの潮流を止められないかもしれない。一般大衆はこれをどの程度まで考えよというのか？ 明らかに、シリアでアルカーイダを武装させたのが意図的だったように、水門を開いて、ヨーロッパ人のテロリストを呼び込むのも意図的になされるだろう。すると彼らはシリアで NATO の代理戦争を戦い、同時に帰国して、ますます激しくなる NATO の自国民への戦争にも加わることになる。

(最後のセクションは省略)

<https://www.youtube.com/watch?v=k83L3I6Z35w>

トニー・カルタルッチは、バンコクを基盤とする地政学研究者、評論家。特にオンライン雑誌 *New Eastern Outlook* に寄稿している。<http://journal-neo.org/>